

『人文科教育研究』の発刊に寄せて

石井庄司

『人文科教育研究』の発刊を心からおよこび申し上げます。

万葉集の柿本朝臣人麿歌集に出るという歌に「新治の今つくる道さやかにも聞きてけるかも云々」(巻十二一八五五)というのがありますが、まさに、その心持ちです。

新治の筑波に新しい研究の成果がみのでありまして、よろこばずには居られません。

思えば、まさに三十年前のこととなります。昭和二十五年に、東京教育大学が発足して、はじめて、人文科教育の講義を担当しましたとき、いったい、どうしていくべきか、実はとまどいました。教育学部の学生よりも、文学部から 国語国文また漢文科の学生だけでなく、英語英文学、独文・仏文、さらに倫理といった、広い範囲の学生の方が、はるかに多い有様でした。

そこで、私は、こうした人文の基礎にあるコトバの教育の問題を取り扱うべきものと考えたのでした。

戦後まもない頃、東京大学の夏期大学で、大内兵衛教授の経済学を聴講したことがありました。その時、大内教授は、経済学の本命としては、埼玉の方にいる農家の主人から、牛を一頭売却したが、何時売ったらいいかという質問に的確に答えることができるようなものでありたいと言われました。

私は、教育学部に所属して、つくづく、教育学とは経済学に似ているものだという気がいたしました。

その頃、私は、大学の議義日よりも、多くの日を文部省に出勤して、国語科の学習指導要領の編集に働いておりました。大内教授ではありませんが、一人の国語教師の質問に適当な指示を与えることができるためにこそ、この人文科教育の研究を進めなければならないと考えました。

学内では、また、大学院の設置についても、いろいろの論議を交してきました。そんなとき、アダム・スミスの経済学のことを書いたものを見て、理論と歴史と政策の三方面であることを知り、わが人文科教育の研究にも、その三つの方向があると考えました。

どこから手をつけるか、まず、人文科教育の理論の歴史をてがかりとして、理論と政策の基礎にしたいと考えたのでした。しかし、今や、日暮れて路遠しの感です。

そこへ、今回の『人文科教育研究』発刊のお知らせで、まことにありがたいことで、心から、その発展を祈ります。

昭和五十四年二月

東京目白台にて